

01

第1の旅

三輪山は、なにやらあやしい雰囲気がある！

■1-1 思えば伊勢と三輪の神、一体分身の御事 いまさら何をいわくらや！

1. 大和の山の辺の道、何かが聞こえる！

第10代崇神天皇の磯城瑞籬(しきみずがき)宮は大神神社の南側に、12代景行天皇の巻向日代宮は三輪山のふもとにあった。両天皇のお墓といわれる前方後円墳も山の辺の道に沿っている。正確には分からないが古代大和の中心は三輪山を仰ぎ見る場所にあった。そして三輪山麓を南北に通っていたのが山の辺の道だ。

この時代、現在の大和盆地の中心部分は大和川の湿地帯で、恒常的に通ることができる道はなかった。山の辺の道はかなりの高台を通っているので、水に浸かることはない。盆地を隔てて遠くに二上山を見ることが出来る。当時の支配者はまさに大所高所に立って人々の生活を見守っていたのだろう。

桜の季節、大神神社春の大祭の後宴能をみるために奈良駅から JR 万葉まほろば線に乗って三輪駅に向かっていった。ところが三輪山が見える辺りから、なにか私を呼ぶような声が聞こえる気がした。同行の奥さんに「神さまがよんでいる。山の辺の道を歩いて、確かめてから大神神社に向かうから！」と言って、三つ手前の長柄駅で途中下車した。大神神社へは何回も来ているが、奥さんもしばしば「神さまが招いてくれる気配」を感じるという。わが家にとっては大神神社＝三輪明神は守り神だ。毎年数回はお参りにしている。



長柄駅で下りて由緒正しい大和(やまと)神社に寄った。この神さまが呼んで下さったのではないかと思ったが、境内にある戦艦大和の碑からはなんの気配は感じなかった。それでも一応お参りしてから山に向かった。山の辺の道を少し歩いて衾田陵にも寄ってみた。ここでもなにも感じない。さらに、しだれ桜のすばらしい崇神天皇陵のそばの休憩所で花見をして景行天皇陵を越え、巻向日代宮に行った。少し何か感じられたので、奥に入ってみると、兵主神社がある。その宮前に相撲神社があり、野見宿彌の土俵入りの石像があった。相撲発祥の地というが、つい最近造られたばかりだ。珍しい神社だが、今日聞こえた呼び声はここではなかった。



後宴能の始まる時間を気にしながら、山の辺の道を走った。三輪鳥居のある檜原神社で靈気(パワー)がぐっと高まった。この神社に最初来たときには「きっと火事で建物がなくなっただろう」と勝手に解釈した。しかしこの神社には最初から三輪の鳥居しかなかった。本殿は三輪山の磐座、拝殿はなし。すこぶるシンプルな神社だった。

しかしこの神社には天照大神もおられたという由緒正しい重要な神社だ。なんで伊勢の神さまである天照大神がこんな場所にいたのか?? 後に伊勢神宮に行って知ったことだが、天照大神は最初から伊勢におられたわけではなく、ヤマトヒメに連れられて各地を旅して、最後に伊勢の地に祀られたのだった。各地に天照大神のお旅所である元伊勢の宮があるが、この檜原神社は最初の元伊勢宮なのだ。それでわかったが、この神社の靈気=パワーは尋常ではない。それでも私を呼んだ神さまの声は聞こえなかった。もう大神神社は近いので山の辺の道を後宴能に急いだ。

しかし檜原神社から10分ぐらいでお寺の脇に出た。「おおーっ、ここだ!」私を呼んだ声は玄賓庵というお寺の中からだった。お寺には神さまはいないはずだが、昔は神も仏も一緒だったから、あり得ないことではない。中に入ってみたら、おばあさんが縁側で昼寝をしていた。起こしては悪いので静かにお庭をまわってみたら、池のほとりに三輪明神の石碑があった。なるほど、三輪の神さまはこのあたりにもおいでになっていたのだ。「ちょっと寄って行きなさい!」と呼んでくれたのだろう。神さまのお話を聞こうとしばらく庭石に腰かけていたら、またたく間に時間が立ち、後宴能は始まってしまった。奥さんには間に合わないむねを急いでメールした。



2. 玄賓僧都のもとによなよな美女が訪れた！

ここから先は謡曲「三輪」で語られるお話しだ。ちょうどこの時間に奥さまは大神神社の後宴能で「三輪」を見ていた。

玄賓庵の玄賓僧都は大変偉いお坊さんだったが、この地に隠遁生活を送っていた。ある時から僧都の元に美女が訪れるようになり、いろいろ悩みを語るようになった。ある日、美女は帰りがけに衣を借りたいと言う。何か怪しい感じがして、僧都は後をつける。大神神社の入り口の杉の木に、僧都が貸した衣が掛けられており、「ふっ」とその美女があらわれる。彼女は自分の正体を語り、天の岩戸の神楽を舞う。

実はこの美女は女装をした三輪明神だった。話を終えて彼女(?)は三輪山の磐座に姿を隠した。そしてこの「能」は「思えば伊勢と三輪の神、一体分身の御事 いまさら何をいわくらや！」の謡で終わる。

日本神話の知識をひけらかすと、天の岩戸の前で神楽を舞うのは天のウズメという美女で、神がかりになりおっぱいを出して踊る。岩戸の中には太陽神である天照大神が隠れているので、岩戸の前は真っ暗のはずだ。神楽を見ながら大いに騒ぐ神々の声を不審に思い、天照大神は岩戸を少しあけると、タジカラオ命が岩戸を引き剥がして放り投げる。その扉は信州の戸隠神社まで飛んで行った。

天の岩戸前で踊ったのは天のウズメだから、玄賓僧都を訪れたのは天のウズメの魂かと思うが、大神神社の三輪流の神道ではこの女性は天照大神ということになっている。

謡の意味は、「伊勢の神と三輪の神はおなじ神さまだよ！ 何でいまさらそんなこと言うの？」である。これは日本国の歴史にとっては由々しき一大事。日本国の最高神である伊勢の神さまである天照大神が、そこらのローカルな三輪の神さまと同じなんて、そんなバカなこと。そんなこと許されるはずはない。 私にとっては、ロ

ーカルな三輪が伊勢と同じと言われたら、畏れ多いが、そりゃうれしい。

強烈なパワーを受けた玄賓庵でしばらくボーッといたら、後宴能も終わる時間になった。奥さんの待つ大神神社の鳥居前の森正にいく。三輪ソーメンをいただく。そう言えば本日歩き通しで、お昼も食べていなかった。



■1-2 三輪山には出雲の神さまがおられる！

大神神社の末社である狭井神社から、神域の三輪山に登らせていただく。昔は登山は禁止だったが、現在は社務所で参拝証の「たすき」を借りれば、神域に入ることができる。私もここ数年毎年お参りをさせていただいている。

三輪山の神さまは、途中の磐座(いわくら)をより代として、降臨される。磐座は3か所あり、辺津(へつ)磐座は狭井神社の近くにある。ここには少彦名の神が祀られている。この神さまは出雲で大国主の神と一緒に国を作りはじめた神さまだが、途中から常世の国に行ってしまった。

少彦名の神がいなくなった後に大国主神を手伝ったのが大物主の神で、三輪山の山頂にある奥津磐座に祀られている。大国主神は途中の中津磐座に、大己貴(おおなむち)神として祀られている。

後宴能の翌日、私は狭井神社に向かった。社務所で住所氏名を書いて300円の祈禱代を払い、拝殿の裏手に湧きだす「ご神水(こうずい)」のボトル(100円)を持って登らせていただく。頂上の高度は460m、神社の高度は100m程度だから、2時間ほどで登ることができる。

神聖な山なのでごみを捨てたりトイレをしたりする者はいない。ご神水以外の飲食も禁止。白装束で裸足で歩く女性に何人も出あった。東京の高尾山に登る時のように「こんにちは！」など声を上げる感じではない。軟弱な私たちはとてもまねはできないが、強い信仰心があれば、足の痛さなど気にならないのかもしれない。

途中に滝の修行場もある。一木一草、一岩にも神が宿るようで、ちょっとした木々、岩には注連縄が張ってある。ひとつずつ拝んでいくと、時間はかかる。

オオナムチがおられる中津磐座をすぎ急坂が終わり、尾根道に出ると高宮(こうみや)神社がある。もともとは大神坐日向神社で、日の出を拝む場所だったようだ。この神さまは、出雲系ではなくそれ以前の大和の神さまらしいが、詳しくは分からない。高宮神社からはほぼ平坦になり奥津磐座に続く。この磐座は注連縄で囲まれた巨石群だ。三輪山の磐座は三つで一体になっている。

日本の神さまは「3」が好きなようで、たいていは3つの概念で構成されている。高天原の神さまもアマテラス、ツクヨミ、スサノオという三貴神からなっている。



急坂
ぬかるみ・浮石注意



三輪の神は蛇の姿で現れることもある。蛇の好物は卵、さらにお酒と菓の神である。磐座の前には卵とワンカップが置いてある。本来は磐座の前で神さまと共食するのが習わしだった。私が十数年前、はじめて登った時に、名古屋から毎月こられるご夫妻が卵を肴にワンカップを飲み祈っていた。これが本来のお参り形式らしいが、現在は飲食も、写真撮影も禁止で、そんなことはできない。

三輪の神さまが蛇というのは、日本書紀に書かれている。日本書紀は古事記と並んで

古代日本の歴史書である。漢文で書かれているので一般人には読めない。日本語で読みやすくなったのが「古事記」と考えてよいが、まったく同じことが書かれているのではないようだ。もちろん私は両方とも原書を読むことはできないので、「古事記」は梅原猛版のを参考にしている。この訳は古来からの翻訳とはかなり異なっているようだが、読み物としては大変おもしろい。

日本書紀の「箸墓」伝説のなかに三輪の神＝蛇 の説明がある。箸墓というのは三輪山のふもとにある巨大な前方後円古墳のことだ。ここに祀られているのは「倭迹迹日百襲姫神」。こんな名前は読めない、書くことも難しい。ヤマトトヒモモノヒメと読むそうだが、長いのでモモノヒメに省略させてもらう。モモノヒメは巫女であったようだ。

……モモノヒメのもとに夜な夜な通ってくる男がいた。夜にしか来ないので、その顔を見たことがない。日々不満を募らせたモモノヒメは、男に「顔が見たい」と迫った。男は「朝になったら櫛箱に入っているが、姿を見ても決して驚くなよ」と告げた。

翌朝、櫛箱を開けたモモソヒメが見たのは「小さな蛇」、驚き叫ぶと、蛇はたちまち若者の姿となり、恥をかかされたと激怒して、大空に飛び上がって三輪山に帰った。

それを見て自分の行為を後悔したモモソヒメは箸で女陰を突き刺して死んでしまう。

箸は丹塗矢と同様に、来訪する神が宿る「依り代」と考えられ、箸で女陰をつくのは巫女と神の交わりを象徴するという。モモソヒメが亡くなった後、「箸」墓が造られたが、昼間は人が造り、夜になると神さまが造ったと言われている。……

……三輪山の神は、姿かたちが大変美しかったイクタマヨリヒメの元にも通った。しばらくするとイクタマヨリヒメは子どもを産んだ。両親は夫もないのになぜ子どもが生まれたかを問いただした。両親は通ってくる男の正体を知ろうとして、麻の糸に針をつけ、相手の衣の裾に刺しておくよう、娘に命じた。

翌日針をつけた麻糸は部屋のカギ穴を通して、三輪山についた。部屋には三巻きの(三輪)麻糸が残っていた。それで三輪山ということになった。……

これは古事記の記述で、さらに話は続いている。

イクタマヨリヒメが産んだ子どもはクシミナカタ神で、その4代後の子孫がオオタタネコだ。崇神天皇の代に疫病が蔓延し、国を揺るがす大ごとになった。崇神天皇の夢枕に立った大物主神は、「私の子孫のオオタタネコを探し出し、神主にして私を祀ったら、疫病は止む」と告げた。崇神天皇がその通りにしたら、疫病は治まり国は平穏になった。



「三輪山を しかも隠すか 雲だにも ころあらなも 隠さふべしや」
※ 額田王(ぬかだのおおぎみ)の詩碑の上にカメラを置いて撮った。

■1-3 箸墓はヒミコの墓か？

箸墓伝説によれば、三輪の神さま大物主神の奥さまは三輪神社のふもとにある「箸墓」に祀られているヒメで、ヤマトトヒモソヒメという。神さまは一夫一妻ではないから、奥さんが何人いてもおかしくないので、モモソヒメと大物主神はご夫婦ということになる。

能の「三輪」で謡われる「三輪と伊勢の神は一体分身にして…」という言葉からみると、三輪の神というのは奥さんのことで、実はモモソヒメが伊勢の神と同じだ！と言っているのではないかと私は推察した。たぶんこんな説はだれも認めないだろうが、私はかなり気に入っている。

宮内庁はこの箸墓を陵墓として管理している。陵墓というのは天皇皇后のお墓である。この地には箸墓と崇神天皇陵、景行天皇陵という巨大な前方後円墳の陵墓が3つある。モモソヒメは第7代孝霊天皇の娘で、天皇家関連ということになるが、他の二人の重要天皇と同じくらいの業績をのこしたとは思えない。それなのにこんなに立派な墓を残しているということは、モモソヒメは仮の名で、本当はもっと重要な人だったかもしれない。モモソヒメがその後に伊勢の神となったと考えれば、箸墓の巨大さの説明はつく。

柳本古墳群

上：行燈山古墳
(崇神天皇陵) →

下：渋谷向山古墳
(景行天皇陵) ↘

巻向古墳群
箸墓古墳
(ヒミコの墓?) ↓



縮尺は同じ
下二つは方角が同じ！

陵墓というのは明治になって、かなり急いで比定したもので、まちがいはかなりあるようだ。崇神天皇陵と景行天皇陵も、その昔は逆だったといわれる。

観光的には天皇陵だが、学術的にはそれぞれ行燈山古墳と渋谷向山古墳と呼ばれ、天皇陵とは言わない。

左は航空写真を同じ縮尺で示してある。二つの天皇陵古墳に比べて、箸墓はすばらしく美しい。私の勝手な推測では、この古墳の主は美しい女性でなければならない感じがする。

ところで、最近の考古学的調査で、箸墓の主は“卑弥呼”であるという説がかなり有力視されている。邪馬台国の女王である卑弥呼なら、天皇陵墓と同じ大きさでも不思議ではない。

箸墓＝モモソヒメの墓＝卑弥呼の墓

箸墓の主は大物主の奥さんのモモソヒメ、すなわち卑弥呼ということになる。卑弥呼は独身と中国の書物には記されているが、神さまとの結婚は「神婚」といい、対外的には独身と考えてよい。

【ちょっと寄り道】

私は卑弥呼という表記は気に入らない。なんで我が大和の女王に対し「卑しい」という漢字を使ったのか。昔の中国は尊大で、周辺の国を蛮族の住むところと見下していた。彼らは「ひみこ」という和語の音を漢字であてた。当時のわが国で「卑」という文字を使っていたわけではない。古事記や日本書紀の作者は十分承知で「卑弥呼」という文字は一切使っていない。古事記の時代には「日の巫女」などの字をあてていたと推察される。

私はこの後は「ヒミコ」とカタカナで記すことにする。さらに「邪馬台国」も邪惡な国みたいで、気に入らない。これもヤマタイコクではなくヤマトの音をあてたもので、悪意が感じられる。邪馬台国もヤマト国とか大和、倭 などと表したい。

【寄り道おわり】

「邪馬台国」は古代史最大の謎で、畿内説、九州説など諸説あり、確定はしていないという。

だいぶ前、私は九州の筑後川の周辺を歩き走りをした。そこには三輪町があり、三輪小学校などがあつた。三輪神社はなかったが、大貴己を祀る立派な神社はあつた。神功皇后が朝鮮出兵のために立てたと言われるそう。近くには朝倉宮もあり、ここそヒミコの里、ヤマト国との表示もあつた。私もこの説はなかなか説得力がある、と思った。

しかしここ山の辺の道を歩くと、大和地方＝古代ヤマト国は自明の理であると思わされる。さらに箸墓の主であるモモソヒメは実はヒミコである、という説もこのあたりでは確定のようだ。

ついでに、モモソヒメ＝ヒミコ も自明の理とならないかな、と思っているのだが。



■1-4 大和の神さまと伊勢の神さまは、天皇の宮と一緒に祀られていた

大神神社から南に下ると、山の辺の道は平等寺を経て海柘榴市(つばいち)へ向かう。この道はさらに長谷寺に向かっており、古代には大変にぎわった道である。平等寺から南に少し進むと、右手に小さな森がある。森の下の方には天理教の大きな教会がある。ちなみにこの教会の鳥居は三輪の三つ鳥居である。

その森の中にひっそりと崇神天皇(第10代)の磯城瑞籬(しきみずがき)宮の石柱が立っている。現在は狭い場所だが、地形的には大和盆地を見おろすすばらしい場所だ。

長谷寺のさらに奥の榛原地方は日本の初代天皇の神武天皇が東から進軍してきたコースである。磯城瑞籬宮は、初代天皇が紀伊半島の狭い谷間から出て、最初に広大な大和盆地を眺める地である。初代神武天皇は大和盆地を挟んでこの地と反対側の畝傍山のふもと、橿原の地に宮を置いたと書かれている。現在そこには立派な橿原神宮が立てられている。しかし橿原神宮は明治の時代になって明治天皇の命で造られたもので、新しい神宮だ。

私は初代神武天皇も宮は三輪山のふもとに造っていたと考えている。その理由は神武天皇の奥さんはイスキヨリヒメである。彼女は大物主神の娘で三輪山のふもとに住んでいた。したがって初代天皇の活動場所は大和盆地の西側ではなく、東側の三輪山のふもと、いわゆる大和のあたりだろうと私は推察している。しかし明治天皇が「初代神武天皇の宮は橿原だ!」と決めたのだから、逆らうわけにはいかないので、橿原神宮で決定と言うことになっている。



初代天皇と神武天皇とかき分けた。初代天皇は神武天皇だが、その天皇は崇神天皇と同じと言う説はかなり有力だ。

天皇の名前で「神」がつくのはこの二人と応神天皇だけ。

神武天皇は紀元前660年2月11日(紀元節・現在の建国記念日)に橿原で即位したことになる。

初代	欠史八代 の天皇								実在
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
神武天皇	綏靖天皇	安寧天皇	懿德天皇	孝昭天皇	孝安天皇	孝靈天皇	孝元天皇	開化天皇	崇神天皇
127 歳	84 歳	67 歳	77 歳	114 歳	137 歳	128 歳	116 歳	111 歳	119 歳

紀元前 660 年……………ほぼ 900 年……………紀元後 240 年

考古学、歴史資料をみると、本当は 3 世紀の第 10 代の崇神天皇の頃にヤマト国が始まったとされている。すなわち魏志倭人伝にあるヒミコの時代である。ムリヤリ時代を 900 年ほどさかのぼらせたので、神武天皇から第 9 代の開化天皇までは、ほとんどの天皇が百数十歳まで生きたことになっている。

現在の歴史書ではこれらの天皇は実在しなかったとして欠史八代(神武天皇は除く)とし、崇神天皇のころからヤマト国が形成されたとされている。

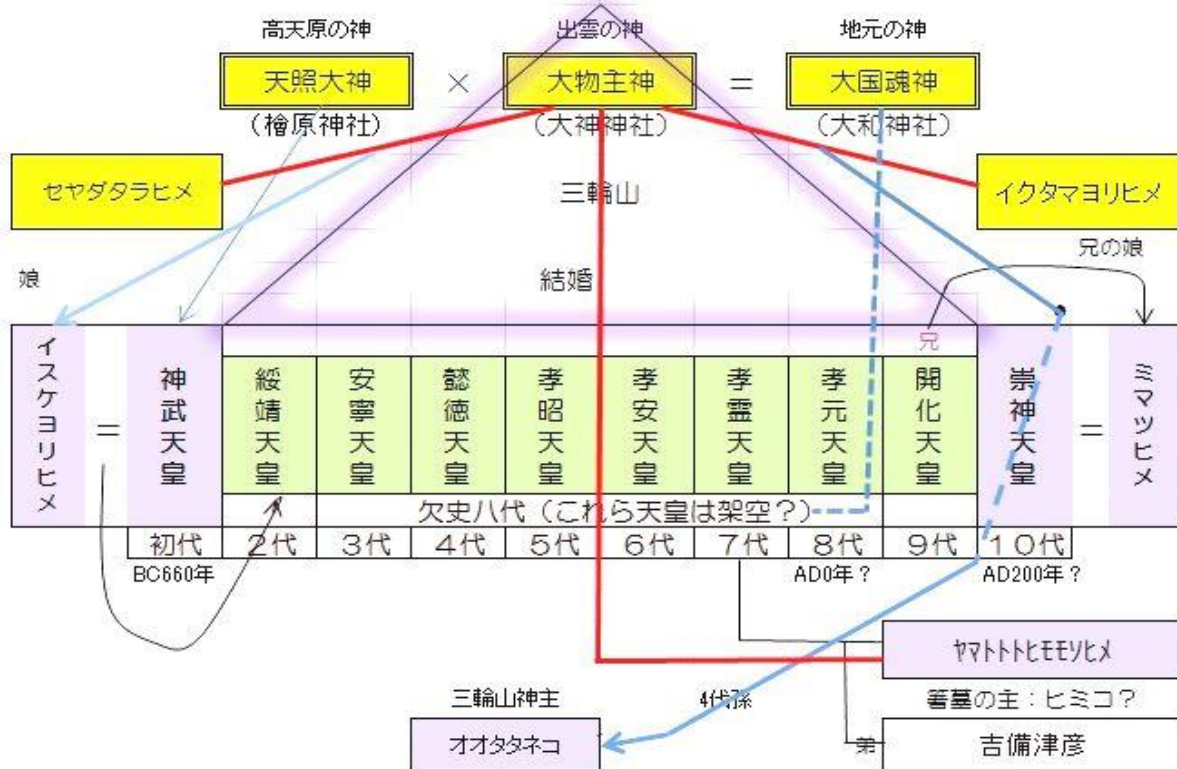
神武天皇＝崇神天皇　これが現在の有力説だそうだ。

紀元前の神武天皇の奥さんは大物主神の娘のイスケヨリヒメ。大物主神の奥さんは第 7 代孝靈天皇の娘(モモソヒメ)である。とすると娘の方が古い時代という矛盾が出てくる。もし欠史八代の説が正しければ、この矛盾は解消される。古事記の著者は分かっていたのだろうが、神話とすることによって、あえて時代的考証を避けている。

ところで大物主神は出雲の神さまとされているが、活躍するのはもっぱらヤマトだけである。古事記の端々には、古代ヤマト政権ができた時には大きな勢力を持った神だったように書かれている。大物主神はもともとは物部氏の守り神だったが、古代ヤマトでは最大勢力だった物部氏は新興勢力の蘇我氏に敗れ、奈良時代には衰退しており、古事記の作者は、重要視しなかったようだ。物部氏の遺跡は現在、天理の山の辺の道にある石上神社に残されている。なかなかすばらし神社で、私が山の辺の道を歩く時にはいつもこの神社を出発点にしている。

話は崇神天皇の時代に戻る。天皇家の祖である天照大神と地元の大国魂神とは天皇の宮と一緒に祀られていた。ところがこの二柱(神さまは一柱、二柱と数える)の神はとても仲が悪く、その祟りで国中に疫病が広まった。崇神天皇は二柱の神を宮中から出して別々の地に移して、大物主神の末裔のオオタタネコを神主にして祀らせたところ、やっと疫病は終息したという。地元の大国魂神は大和神社へ、天照大神は檜原神社へ、大神神社には大物主神と、三柱の神さまが、別々に三輪山のふもとに祀られる時期があった。

三輪山麓のヤマトにおられた三柱の神と天皇



大和の地がさまざまな勢力が入り乱れていた時期を象徴させていると私は考えている。もともとの地元の大国魂神、出雲から物部氏が送りこんだ大物主神、日向から神武天皇が伴ってきた天照大神、そのほかにも一言主神とか高鴨神などもおられたが、ある時期、この三柱が主要勢力であったのだろう。

古事記は天皇家の歴史書であるから天皇家は堂々と大和へ入ってきたように書いてあるが、実際は紆余曲折があった。守り神である天照大神は檜原神社に追い出されたり、ヤマトヒメに導かれ各地をさまよい、やっと最後に伊勢の地に落ち着いたというのが実際の姿である。天照大神の巡った宮は「元伊勢」と称されている。

これら神さまは神話のなかだけの話だと考えれば、それは簡単だが、神話は歴史の反映で、それぞれにモデルがあったとする方が、古事記を読む楽しみが広がる。

ヒミコは実在の人物であるが、いろいろ事情があって天皇家の歴史書には登場しない。しかし歴史的出来事は完全に隠しおおせることはできない。古事記にも日本書紀にも、ちらちらとヒミコの姿が見え隠れする。

2013 年、三輪から伊勢へ、ヒミコを探して神話の地を歩いてみることにした。最初は和歌山から出雲へ、遷宮の年であるので最初に訪ねた。ヒミコの夫である大物主命(大国主命)に出会うかもしれない。

■1-5 奥さま、京都の能楽堂で「三輪」を舞う！

時間は前後するが、追加の話をさせてもらいたい。

我が家の奥さまはここ7年間、仕舞の稽古をしている。若い頃にも稽古をしていたが、子育てで忙しい時代には休んでいた。亭主も退職し時間ができたので再び仕舞いの稽古を再開した。目標は自分の名前の「三輪」を舞うこと。しかし「三輪」は大変難しく、なかなか挑戦することはできなかった。

それでもめげずに毎年京都の大江能楽堂などで舞囃子を舞ってきた。そして今年10月5日、ちょうど天照大神の子孫である皇室の姫様が出雲の国造家に嫁入りするという歴史的な日に「三輪」を舞うことができた。

三輪は神さまの物語なので、舞手に神さまが降りてくることがあるという。奥さまの言によると、途中であげた手に突然神さまが依りついてきた感じがあったという。見ていた私の目にも、途中から急に舞が変わったような気がした。

そして最後の

「思えば伊勢と三輪の神、一体分身の御事 いまさら何をいわくらや！」

の謡は神さまの声のように聞こえてきた。

神さまは、私たちに「この意味を考えなさい」という問題を出したのではないかと思っている。昨年大和、出雲、高千穂、日向、丹波、但馬をめぐる伊勢に行った。そこで得た知見から、伊勢と三輪の神、さらにヒミコとの関連を考えているのだが、なかなか深層は見えてこない。三輪神社紀行をまとめながら、もう少し考えてみたい気がする。



< 2014年10月5日 大江能楽堂で 舞囃子「三輪」 >